

『恩納村史 第三卷 戦争編』

発刊によせて

吉浜 忍 (「戦争編」専門部会長)

77年前の沖縄戦で戦場となった恩納村。逃げ惑う住民、命を落とす住民、飢えに苦しむ住民など、住民を巻き込んだ地上戦闘が恩納村でも繰り広げられました。現在のロシアによるウクライナへの軍事侵攻は沖縄戦を想起させます。

このたび『恩納村史 第三卷 戦争編』が発刊されましたので、その概要を紹介いたします。

第1部 論述編

第1章 戦争への道のり

1898(明治31)年、沖縄にも徴兵制が適用され、沖縄・恩納村からも日露戦争に出征するようになりました。アジア・太平洋戦争が始まると、出征者や戦死する兵士の数も増加しました。前線を支えるため銃後を強化する必要があり、そのための法律や組織がつけられました。ここでは国家総動員法、大政翼賛会、隣組、警防団、銃後を守る女性たちなど、恩納村での動きを明らかにしました。また、国民を戦争に同調させるために国民精神総動員運動が展開され、恩納村出身の新城正一が作曲した「愛馬進軍歌」が一等当選し、全国的に愛唱されました。さらに、錬成教育が重視された国民学校が発足し、恩納村でも軍国主義教育が展開されました。

第2章 沖縄戦前夜の恩納村

沖縄に第32軍が配備されると、村民は飛行場建設や陣地構築に駆り出され



専門部会の様子

第3章 恩納村における沖縄戦と村民の戦争体験

個々人の戦争体験がそれぞれ違うように、恩納村でも地域ごとに戦争体験が異なっています。ここでは恩納村の戦争を米軍上陸と北部侵攻、第2護郷隊との戦闘、米軍掃討戦の中での住民の体験を地域ごとに見て行きました。とくに恩納岳・石川岳は中部からの避難民、恩納村民、護郷隊、敗残兵など軍民混在の状況で、そこに米軍が侵攻し、激しい戦闘が展開されました。住民を巻き込んだ戦闘は、犠牲を増大させました。

ました。村内でも、恩納村に配備された日本軍によって、陣地構築や木材伐採、作戦道路建設が進められました。1944年10月10日の十・十空襲の際には恩納村内に被害はなかったものの、飛行場建設に徴用されていた村民が巻き込まれました。また、多くの村民が読谷飛行場や伊江島飛行場が攻撃され黒煙が上がるのを見ていました。被害に遭った那覇の避難民が村内に押し寄せ、村民は戦争を身近に感じるようになりました。さらに、防衛隊・護郷隊などに村民は根こそぎ動員されました。



『恩納村史 第三卷 戦争編』